

「人生の門出」、あるいは箱詰めの人生

私市保彦

寓話か小説か？

一八四二年に「ラ・レジストラテュール」紙に発表され、最終的に『人間喜劇』の「私生活情景」に収められた『人生の門出』は、『人間喜劇』のなかでは特異な作品なので、論じられる機会も多いとはいえない。論じられるとしても、主人公のオスカール・ユッソンがバルザックらしからぬ卑小な人物である点や、筋書のなかで偶然の出会いが大きな比重を占めるといったリアリズムから逸脱したシナリオの特徴が指摘されたりで、とどのつまり『人生の門出』ほどバルザックらしからぬ小説はないということになる。

たしかに、この物語は偶然ではじまり偶然で終わる。パリ発のカッコイと呼ばれるがたの旧式二輪馬車にセリジエ侯爵が身分を隠して乗りこむと、相客の五人のうちの四人までが自分の城館を目指して乗りこんでおり、もう一人は侯爵の土地の売買の関係者であったという偶然からこの物語がはじまり、それからほぼ十四年たったころ、以前

に偶然乗り合わせた主な面々が、伯爵をのぞいてまでも同じ馬車屋の今度は二輪馬車よりは上等の四輪乗合馬車に乗り合わせ、そこに十四年の年輪が刻んだ人生の顔をつき合わせるといった結末になるわけだから、これ以上ないほどにご都合主義で不自然さわまる偶然の幕切れである。

そこで、フィリップ・ミュステイエルは、つぎのようにいうことになる。

『人生の門出』が小説的な構成の面でもっとも驚くべき小説のひとつであるのは、これ以上論理になかったものはないと同時にこれ以上に筋の通らないものはないといった双方の特徴をあわせもつ混種の観念、つまり偶然という観念を、まさに『人間喜劇』の作者がはじめて物語の中心に据えたからである（『人生の門出』論——偶然の作用、機会の場、時宜喪失の小説）²⁾

また、この物語にみられる凡庸な登場人物をめぐって、コンバクトで内容のある解説をしているピエール・バルベリスは、『人生の門出』は、おそらく、バルザックのすべての作品の中でもっとも気持の高揚を引き起こさない作品である」（『プレイヤード版「解説」』³⁾）として、この作品にフロベールの『感情教育』や自然主義の前兆を嗅ぎ取っている。

しかしこの種のいい方は、『人生の門出』をバルザックがその創造主でもあり名手でもあった十九世紀リアリズム小説の範疇のみからみることからきているのではないか。その見方からすると、『人生の門出』にみられるリアリズム小説からの逸脱、バルザック的になけた外れの野心と意志の人物の欠如に、驚くこととなる。その点では、『人生の門出』はまず何より笑劇（ルビ・ファルス）である」といえるアルマン・オーグの説は、『人生の門出』の特徴を

うまくとらえているが、それでもこの小説の構造上の特徴を説明することにならない。

では、『人生の門出』はいかなるジャンルの小説であろうか。私は、『人生の門出』は寓話ではないが、限りなく寓話に近い作品であると思っている。それと同時に、寓話的な筋の骨格にはまぎれもなくリアリズム小説として肉付けがされ、舞台装置には『人間喜劇』の書き割りも描かれている。いわば、寓話とリアリズムのヤヌスの顔をもつ小説が『人生の門出』なのである。寓話はリアリズムのように必然性の網の目を張る必要はない。風刺とか教訓などの目的のために自由自在に場面を組み合わせ、いかに奇想天外な筋書きであつても一向にかまわないのが寓話であつて、その点ではリアリズムと対極の形式をもつ昔話に近接しているジャンルといえる。じつは、バルザックはこうした寓話のジャンルに無縁の作家ではけつしてないばかりか、ちようど『人生の門出』を執筆していたと同じ時期の四一年から四二年にかけて、エツツエル編集の『動物の私的公的生活情景』で、躍るような筆致と痛烈な風刺でもつて動物寓話の傑作を四編も書いているという見落とせない事実がある。

このように、『人生の門出』を深刻な小説ではなく、一種の寓話的な小説として読めば、こんなに面白い小説は滅多にないとすら思える。小説の醍醐味さえ感じられる作品であると、私はつねづね思っている。『人生の門出』が寓話的な作品になったのは、むしろ『人生の門出』がバルザックの妹ロール・シュルヴィールの『二輪馬車の旅』という教訓物語の書き直しから生まれているからであるから、まず『人生の門出』の異常生誕の経緯と筋書きの発展の概要を追つてみたい。

初形「二輪馬車の旅」

一八四一年九月十八日にバルザックの許に雑誌「家庭博物館 (Musée des familles)」の主幹のピケより会見の申し

込みがあったが、それは創作の執筆依頼であり、十月二日のピケからの手紙によって三千行の創作という具体的な内容が示された。^⑥ 経済的に逼迫していたバルザックは早速依頼を引き受けることになったが、はじめは「ダヴィッド・セシャル」(『幻滅』の冒頭)というタイトルが誌上に予告されたが、ついで「若者たち」となった。これは、バルザックが掲載作品の予定を変えたためであることは明らかであり、よく知られているように、それには妹の原稿が介在している。詳細ないきさつは不明であるが、折しも妹のロールが「二輪馬車の旅」という小品を提供してくれたので、早速バルザックは、その物語をふくらまして一編の小説を編み出すことを思いついたのである。

ロールは当時レリオ (Lélio) という筆名で女流児童文学作家として自立するまでになっ^⑦ていて、「子どもジャーナル (Journal des enfants)」などに教訓童話を発表していたが、「二輪馬車の旅」も若い読者向けに書いていたのである。バルザック死後の一八五四年に刊行された作品集『炉端の友 (Ami du foyer)』に「二輪馬車の旅」は収められ、そこにある自分の娘たちへの献辞には、「あなた方のためあなた方と共に書かれたこれらのお話は、あなた方子ども時代をとその幸福な時代にあなた方を愛した人々のことを思い出させてくれるでしょう」と書かれていることから、そのことは推測されよう。^⑧ アイデアが浮かばないときや、原稿締切に苦慮していたときにいかに妹に頼っていたかということは、マリルジャン・デュリー夫人の研究『バルザック「人生の門出」が明らかにしているが、同書ではとりわけ、初期作品『アルデンヌの助任司祭』執筆の際に、バルザックがロールの下書き原稿を心待ちにし、「助任司祭! 助任司祭! 助任司祭! 矢つぎ早に送って下さい」(一八二二年八月二十日、ロール宛)などと執筆を急かせているいきさつがたどられていて、バルザックがいかに妹の筆力に頼ることがあったか彷彿としてくる。^⑨

他の執筆に追われながら一方では経済的にも追われていたバルザックは、こうして、妹の作品を下敷きに急いで書き直した原稿を「家庭博物館」に送ることになるが、なんと「家庭博物館」はその原稿の掲載を最終的に断ることと

なった。その事情を明らかにする資料は残っていないが、ロヴァンジュールは、「臆病な（家庭博物館）にとつては少々自然主義的に過ぎる（赤裸々の表現が多いという意味であろう）」からではないかと推測し、デユリー夫人はそれに加え、原稿が約束の三千行を超え四千三十五行になったからであるとす。〔私の中編小説が四千行になったばあいは、貴殿はそれを没にして、私はそれを引き上げて、版の組み代の精算を考慮に入れ、三千行のほかの作品で差しかえることを承諾します〕という念書を、バルザックはピケ宛に四二年十月六日の日付で書いている。¹² バルベリスはさらに、母親をないがしろにするオスカールの性格やセリジー侯爵の夫婦関係が暴かれる部分などが雑誌にふさわしくないという理由を想定しているが、いずれも十分に考えられる理由である。

青少年や家庭婦人の読者を想定して一八三三年にエミール・ド・ジラルダンによつて創設され、四万部の予約購読を集めた週刊誌「家庭博物館」は、一九〇〇年六月まで継続した堅実な雑誌で、歴史・地理・芸術・科学などの読みに文芸欄を設けていた。ジュール・ヴェルヌの初期の科学読物や科学小説もこの雑誌に掲載されている。とりわけ文芸欄は家庭婦人にも愛読されていたというが、¹³ それだけに作品には相当のモラルも要求していたはずで、母親をないがしろにする少年の描写はもつてのほかということになるであろう。¹⁴ しかし、母親を恥じる少年の姿はロールの原作の主要な挿話であり、バルザックはそれを踏襲している。

ロールの原作は、前述の『炬端の友』とブレイアード版に採録されたテキストで読むことができるので、それによつて、まずあらずじを紹介してみる。¹⁵

物語は、「二輪馬車 (Le coucou)」、「道中 (La route)」、「城館 (Le château)」、「結末 (Conclusion)」と題された四章で構成されている。

第一章「二輪馬車」は、一八二五年九月の朝、テイエリーという馬車屋がバリのプチサンマルタンの宿屋から

クレの村まで客を乗せて定期便を出す所からはじまる。馬車には、母親に世話を焼かれながら見送られるジョゼフ・ポリケという少年と、アルフレッドとジュール・デュボワと名乗る二人の若者が馬車の席を取り、最後に背の高い男が乗りこんでくる。男は管理人の不正を暴くために領地の城館に赴くモリス伯爵であることをティエリーは知っていたが、男は相客には名前と身分を明かさず、馬車が出発すると三人を観察しはじめた。

第二章「道中」では、乗客同士の会話がはじまり、アルフレッドがジョゼフに世界中を駆けまわったと自慢すると、ジョゼフは、父が自分をヨーロッパ旅行に送り出す予定であるといいかえす。ここから、アルフレッドの法螺話がはじまる。スペイン戦役帰りの軍人で、トロカデロ攻略にも参戦して、受勲しているという。どうして勲章をつけていないのかと伯爵が訊くと、これから訪ねる城主が軍人に警戒心をもっているからだと答える。その後のジョゼフとのやりとりの中で、母親に世話を焼かれるのを恥じていたジョゼフは、見送りにきた女は家政婦だというが、他の客たちはその嘘をすぐに見破ってしまう。馬車がボンデーで一服したとき、アルフレッドがジョゼフにケーキをおごろうとすると、ジョゼフは子ども扱いにされたとばかり憤慨してはねつける。

馬車が再び走りはじめると、アルフレッドはデュボワに話しかけはじめ、彼が画家であることを聞き出す。デュボワはローマ賞に輝いた画家であると名乗ると、ジョゼフはまたも対抗心を燃やし、自分は外交官になるように父にいわれているといいながら、父はモリス伯爵の友人だと自慢する。さらに、伯爵は成り上がり者の欲張りであるなどと伯爵の身分や性格をばらすと、ジュールは首をかしげるが、アルフレッドの方は面白がる。そのとき伯爵は突然馬車を降りて、小道に消えてゆく。

残された一行が、消えた男は何者かいぶかしがっていると、伯爵の居城が見えてくる。そこで、あの立派な城は誰の城かとジョゼフが御者に訊くと、御者は父親が城主のモリス伯の友人と聞いていたのにその城館を知らないのかと

生まれついでのあるいは生まれたあとに身につけた法螺吹きよ、たとえ若い時代にあなた方の嘘が笑いとばされたり許されたりしても、嘘をつき続け、嘘が習い性となるようなことがあれば、人からの敬意をすべて失うことになる。それとは逆に、口に出したことを守る人は誰しも、どのような身分に生を受けようと、すべての人の尊敬に値するのである。(ロール「二輪馬車の旅」)

このような教訓でもってしめくくられるこの物語は、なによりも教訓物語の形式を取っている。バルベリスは、ベルカンやブーイ風の教訓童話であるとしているが、教訓のためのわざとらしい筋書きや会話で成り立っているベルカンやブーイの童話にくらべ、話の運びと、馬車の旅の会話は生彩に富んでいる。バルザックにもそのまま使われることになる、身分を隠した城主と同じ城館に向かう若者たちが乗り合わせ、少年が城主を中傷するというシナリオもうまくできている。

「家庭博物館」から「ラ・レジスラテュール」へ

バルザックのよる書き換えは大筋からいうと、ロールの原作の特徴を生かしながら、大幅の加筆によって、バルザック特有の世界『人間喜劇』となる小説群の一角に物語の位置を確保させることにあつた。その際、主要な人名も変更されているので、概略をのべるまえに念のためそれを整理しておこう。ロールの人名からバルザックの人名の順序で列記する。

ジョゼフ・ポリケ (Joseph Porriquet) ↓オスカル・ユッソン (Oscar Husson)

モリス伯爵 (Le comte de Maurice) ↓セリジー伯爵 (Le comte de Sérisy)

呆れかえる。あげくの果てに、三人共に城の訪問者で、ジョゼフは管理人のルノーの許に母親から送られた少年であることがばれ、アルフレッドは公証人の書記見習いであり、ジュールは絵を描くためなく城の大理石を塗装するためにきたことがあばかれてゆく。

第四章の「城館」では、法螺を吹いた三人と管理人が伯爵の前に立たされる。伯爵はアルフレッドに対しては持参した契約書にサインできぬとつっぱね、ジョゼフに自分の悪口を吹きこんだ管理人に怒り、解雇する本当の理由は不正を働いたことにあるとしながら、管理人を城館から追い出す。一方ジョゼフについては、翌日のバリ帰りの馬車で追い返す。ただジュールに対しては、画家として大成するまで援助者になることを約束して寛大な態度をとる。

終章の「結末」では、馬車の旅から六年後、昇天祭を祝う村の祝日に合わせてとりおこなわれた絵の開幕式の日が出来事が描かれる。絵は、画家として大成したジュールが保護者になった伯爵のために描いたものであった。開幕式のあと、伯爵がジュールを連れて、村祭りで開催されている射撃競技を見にゆくと、そこにアルフレッドが現れ、賞をかっさらう。再会したジュールにアルフレッドは本の行商をしているといい、絵を商つてもよいとうそぶく。自分が誰だかお判りですかと伯爵にいうと、伯爵は「けっして変わらぬ者はいつでも見分けがつくよ」と皮肉をいう。

この三人にかくれるように、木の陰に二人の男がひそんでいたが、それはジョゼフと管理人のルノーであり、二人は共同して穀物取引をはじめいかがわしい投機をしているが、いつも貧しく、こそこそ隠れねばならない暮らしをしていると語られる。そして、最後はつぎのような言葉でしめくくられる。

「撒いた種を刈り取る」という神聖な言葉が、この世で真実であるのはわかりきったことである。というのものは、自分のあやまちから招いた避けられぬ結果の重荷を、ほとんどいつでも担うことになるからである。

アルフレッド (Alfred) → ジェルジュ・マレ (Georges Marest)

ジュール・デュボワ (Jules Dubois) → ジョゼフ・ブリドー (Joseph Bridaud)

ティエリー (Thierry) → ピエロタン (Pierrotin)

ルノー (Renaud) → モロー (Moreau)

これはロールの物語にあらわれている人物のみの併置であり、バルザックは、物語の肉付けと『人間喜劇』の世界にはめこむために、それ以外の多彩な人物を増強して、配している。

さてここで、加筆について要約すると、まず第一の加筆は、二輪馬車が交通機関として当時いかなる特徴を持っていたかという冒頭の部分にある。この加筆を通して、二輪馬車の持ち主のピエロタンが伯爵の身分の秘密を守ることと引き替えに、伯爵からいかに新式の馬車を手に入れようとするかといういきさつの詳細な説明があり、その背景が、管理人モローの不正を伯爵に領地に散在する他人の土地の買入からむ取引という、具体的な状況で設定されている。また、車中の会話にいつそう生彩をあたえるため、軍人と称する公証人書生の法螺をエジプトにまで拡大したり、大画家の名を騙るブリドーに同行する絵描きの書生レオン・ド・ローラを登場させ、会話の所要所にことわざのこじった駄洒落を吐かせ、いわば滑稽小説の手法をとりいれたりする。さらに、少年が伯爵の秘密をばらすという物語の核心の挿話では、伯爵の秘密を皮膚病という身体的な疾患の話にし、インバクトのある挿話になっている。これによって、各人が法螺を吹く馬車の場面はじつに生彩に富む情景になった。しかしバルザックにとっては、こうした手直しだけでは収まらなかった。

というのは、ロールの原型は、起承転結のうち、第一章から三章までは「起」、第四章は「承」であるが、そこから一気に「結」の終章がきてしまうので、小説の構成としては欠陥があるのを否めないからである。

すでのべたように、教訓的寓話としては「転」の部分抜きでいきなり勸善懲惡的結末がくることもありうるが、これではとうてい近代小説的空間にはなりえない。というわけで、バルザックは、「転」の部分として、まったくオリジナルなドラマを挿入した。しかも、この加筆こそが、『人間喜劇』の一角のドラマに再生するための触媒となったのである。いかにオスカー少年の性根をたたき直すために、カルド叔父が法律事務所に入れて、法律家としてのストイックな勉学と修行の毎日を励む生活を送らせるか、『シャベール大佐』の冒頭と通じる場面であるが、法律事務所の書生たちがいかに悪ふざけをするか、そのあげくフロランティーンの夜会でいかにオスカー少年が賭に手を出して致命的なあやまちをおかすかという、後半に肉付けされたこのパリのドラマは、前半の悲喜劇を『人間喜劇』の劇的な空間に転回させるベクトルをもつことになった。フロランティーンがこの挿話ではじめて『人間喜劇』に登場したり、カルド叔父がこの挿話では準主役としての位置を占めたりで、『人生の門出』は、この場面こそ『人間喜劇』にふさわしい劇場空間にふくらんでゆく。

しかしバルザックは、結局はロールの原作の寓話的な原型をこわすことはなかった。原型の踏襲は、結末で登場人物を一堂にあつめるといふ不自然な大団円を繰り返すことでなされているが、じつはバルザックは、ロールの原作以上に不自然な結末をもつてくることで、原作以上に寓話性をたかめているのである。ただ、それによってバルザックが意図したのは、七月革命後のルイ・フィリップ時代を痛烈に風刺するもうひとつの寓話に高めることであった。それについてはのちにふれることにして、まず、そうした変貌をテキストの移行という次元で要約してみよう。

前述したように「家庭博物館」誌が掲載を断ることになったので、バルザックは「シャントリー夫人」(『現代史の裏面』)を代わりに同誌に送る一方、「二輪馬車の旅」の方は、友人の医師ナカール博士の知人が発刊した「ラ・レジスラテュール (La Legislature)」紙に「人をかづく危険 (Le danger de mystification)」というタイトルで掲載する。

とにした。このタイトルは、「公証人書生の旅 (Un clerc en voyage)」、「二輪馬車の旅 (Un voyage en coucou)」、「若者たち (Les Jeunes Gens)」と二転三転したあとのものであるが、タイトルは最終的に単行本の『人生の門出 (Un début dans la vie)』となるわけである。掲載紙の変更にもなつて——というよりおそらく内容の膨張が掲載紙の変更をもたらしただというべきであろうが——九章目構成から十四章構成に引き延ばされ、その際、九章目が書き直され、九章末尾の「結末」が書き直され、十四章の末尾に移されてゆく。

ここで注目せねばならぬことは、なんといつてもバルザックが原型の寓話的な結末をあくまで生かそうとしたことである。こうしてバルザックのその意図は、「家庭博物館」での校正段階で、結末の別案を残すことになった。それによると、原型の結末では馬車の事件から六年後という設定が、九年後の七月革命後に移されている。また、伯爵が村の祭りに大画家に大成したブリードーを連れてゆくと、レジェ親父の娘と結婚し公証人になっているオスカルがあらわれたり、元管理人のモロー一家が上院議員のカミュゾに娘を嫁がせ繁栄をきわめていることがわかると描かれている。おそらくそのあとで、法螺吹き¹⁸の元公証人書生のジョルジュが尾羽うちからして現れると思われるが、その部分までは残されていない。しかし、バルザックはそれにも足らず、結末を馬車の場面に書き改め、そこに登場人物たちが乗り合わせるという設定にしたのであるが、その意味については後述する。ただし、「ラ・レジストラテュール」紙のために書かれた終わりの部分の原稿は紛失しているとロヴァンジュールは記している¹⁹。

「ラ・レジストラテュール」紙の連載も、前半が発刊号の一八四二年七月二十六日から八月七日まで、八月一日と四日を除いて掲載され、四日の休みを置いて、八月十二日から再開され、数日から一週間ほどの間隔をおきながら、九月四日まで連載されて完結することになる。連載はつぎのような十四章に分割されていた²⁰。

一章、「幸福になるためにピエロタンに欠けていたもの (Ce qui manquait à Pierrotin pour être heureux)」

- 二章、「危地に落ちた管理人 (Le Régisseur en danger)」
- 三章、「旅人 (Les voyageurs)」
- 四章、「高名なツェルニーシヨルジヤの息子 (Le Fils du fameux Czerny-Georges)」
- 五章、「ミスティグリが目立つこと (Où Mistigris se distingue)」
- 六章、「ドラマが始まる (Le Drame commence)」
- 七章、「モロー家の家庭事情 (Intérieur du ménage Moreau)」
- 八章、「ドラマの大詰め (Le Dénouement du Drame)」
- 九章、「母の苦惱 (Douleurs de Mere)」
- 十章、「カルド叔父 (L'Oncle Cardot)」
- 十一章、「法律屋の生活と茶番 (La Vie et les Farces de la Bazoche)」
- 十二章、「フロランティーナ・イ・カビロール伯爵夫人 (La Comtesse de las Florentinas y Cabiroi)」
- 十三章、「またも破局 (Autre Catastrophe)」
- 十四章、「結末 (Conclusion)」

このうち、十四章の「結末」は一八四四年の単行本『人生の門出』の初版では、「オスカールの最後のあやまち (Dernières fautes d'Oscar)」と改題された。また、四五年に『人間喜劇』第四巻に入れられたときはこれらの章割りは廃止された。

さて、中休みのあと連載されたのが九章「母の苦惱」以下の五章分であり、バルザックがまったくオリジナルに創作した「転」の部分となるが、おそらく中休みの間にもバルザックは加筆に専念していたのであろう。(八月八日の

ハンスカ夫人宛の手紙で明日までに新しい新聞のための執筆をしていると書き送っている。⁽²¹⁾

驚くべきことは、「ラ・レジストラテュール」紙での前半の組み版は「家庭博物館」が委託したエニユエ&テュルバン印刷所の組みがそのまま使用され、後半は「ラ・レジストラテュール」紙のコペ印刷所の組みであり、見た目でそのちがいがわかるといった奇異なことが起こっている。⁽²²⁾ もともとバルザックは、作品を「家庭博物館」から引き上げる際、組み代を精算し、そのかわりその組み版を「ラ・レジストラテュール」紙に渡したのであるが、それで目に見える形で残ったわけである。これは、バルザックの創作の展開が活字の違いによって残されたという希有な例であろう。⁽²³⁾

二つの馬車の旅

ロールは「二輪馬車の旅」という馬車を舞台の物語を創作したが、バルザックはその筋書きをそのまま生かしながら、それに独自の肉付けをあたえた。バルザックにとつて、馬車の旅のシーンはおなじみのもので、初期作品の『シヤルル・プランテル』（二八二二）に馬車の旅が描かれたり、『アネットと罪人』（二八三三）や『ふくろう党』（二八二九）にも馬車の旅と馬車の襲撃場面がある。また、「王立駅馬車の発着所」（ラ・カリカテュール）誌一八三二年二月二七日号」という小文や、「乗合馬車の出発」（ラ・カリカテュール）誌一八三二年二月九日号」という会話体のスケッチを書いている。⁽²⁴⁾

当時は、エドゥアール・グルドンの『乗合馬車と本街道の生理学』（一八四二）とか、J・イルベールの『乗合馬車の御者助手』（『フランス人の自画像』第二巻、一八四二）といった馬車の風俗を描いた「生理学もの」が書かれたり、馬車の旅を主題にした小説も以前からあった。例えばオギュスト・リカールは、『辻馬車の御者、あるいはパリの敷石上で四十年間』（二八二八）とか、『乗合馬車あるいは前部特等席、中央席、後部席、二階席』（二八三三）な

どの馬車物語を刊行している。そして、後者の筋書きが「二輪馬車の旅」と似ていたということを、バルベリスが指摘している。この物語では、ノルマンディーの牛売買の商人が同乗している若者をついでやろうとオッタヴィアというイタリアの女性との情事を面白おかしく語ると、同じ客室に当のオッタヴィアがいたということになる設定とか、それを聞かされていた若者が幻想を捨てて結局は平凡な市民になる結末とか、「二輪馬車の旅」と『人生の門出』のヒントになったと思われる筋書きがみられる。⁽²⁶⁾

さて、ロールの手からバルザックに移る過程で、バルザックはカッコーとあだ名される二輪馬車について、克明に描写しようとして、その導入部として、冒頭でつぎのように語っている。

鉄道は、今からほど遠くない将来に、とりわけパリ近郊で使用されている種々の輸送方式に変化を及ぼしながら、ある種の輸送事業を消滅せしめることになるだろう。したがって、まもなく、この情景の要素となつて人々や物事は、この情景に考古学的事物といった価値をあたえることになるだろう。⁽²⁷⁾（『人生の門出』）

こうしてバルザックは、すでに骨重的な乗物になり始めた「カッコー」について、お得意の考古学的な観察をしようとする。

カッコーという馬車は、十八世紀から十九世紀初頭までパリからパリ近郊に走っていた二輪乗合馬車のことで、六人から八人の客を乗せていた。鳥のカッコーというあだ名がついているのは、黄色に車体が塗られていたためか、あるいは走るときに車体がたてる断続音のせいであろうと、いわれている。⁽²⁸⁾ いずれにせよ、一八二〇年代では、過去の遺物になりつつあったと思われる。しかしバルザックは、一八二九年でもこのカッコーを愛用していたようで、例え

ば、ダブランテス公爵夫人宛の二九年八月（あるいは九月）の手紙には、つぎのようなことが書かれている。

ヴェルサイユ市門で半時間も待つてから、並木道に、セーヴルまでしか私を運べないという哀れなカッコーが現れるのが見えました。セーヴルでは、二台目のカッコーと出会うことを期待して、あなたも眺められた美しい魔法のような星明かりでパリに向かつて歩き、あなたと同じように、魂を満たす静けさを味わいました。……（中略）……オトゥーユでもう一台のカッコーの健康的だがあが啼くような音が聞こえました。この馬車は真夜中に私をルイ十五世広場に投げ出し、そこでは馬車がもうないので、あわれな足を使つてわが家にたどり着きました。

アンリ・ダルムラは『王政復古期のパリの生活』で、あるゆる馬車のうち「カッコーはアンシアン・レジームをもつとも想起させるものある」として、「カッコーは進歩する方式に従うことがなく、三十年前と同じ方式のまま、馬車も馬も御者も遅れたものである」というN・ブラズイエの『パリの御者』の一節を紹介している。^①このように、「カッコー」という二輪馬車は過去の遺物になりつつあると同時に、古き良き時代を彷彿とさせる乗物でもあったのだ。

物語では、馬車の旅は一八二二年に設定され、それを読む読者は四二年の読者であるから、バルザックはまず、四二年には地方でさえまれにしか見かけなくなった、カッコーによる定期便を経営しているピエロタンの営業の特徴を述べながら、彼が四輪の大型馬車を買入れ入れるために、二千フランの残金の支払いを保証してくれるという約束で伯爵の身分の秘密を守るとい話を、巧みに導入してゆく。

さらにバルザックの重要な改作は、馬車の旅ではじまった物語を馬車の場面で終わらせたことであつた。これは、

村祭りで終わらせるロールの原話や、前節で紹介したバルザックの途中の腹案からも、一転した結末になった。しかし一方では、この改作が、物語の偶然的要素をいっそう強めたということがある。

マクタの事件（アルジェリア西部のラ・マクタ河で一八三五年七月と同年十一月と二度にわたって起こった、アブデル・カデル率いるアラビヤ軍とフランス軍との戦闘）からかなりたった五月の朝の八時に、黒い服をまとった一人の老婦人が、片腕をなくしボタン穴にレジョン・ドヌールの略綬をつけているので、通行人には退役将校であるとわかる三十四歳の男に手を取られ、フォブールサンレド二街の銀獅子旅館の馬車門に立っていたが、たぶん乗合馬車の出発を待っているようだった。……（中略）……

王室の送迎馬車につけられる栄誉に浴しそうな四頭の連銭あし毛の馬をつないだ馬車は、前部特等席、中央席、後部席、屋上席に分かれていた。それは、今日ヴェルサイユ街道で二本の鉄道との競争にたえているゴンドラと呼ばれている大型乗合馬車にそっくりだった。⁽²²⁾（『人生の門出』）

二輪馬車は大型四輪馬車に変貌し、客室も三つに仕切られ、青い羅紗で張られた贅沢なもので、十九人の乗客を運ぶことができる。しかし、御者台には前と同じピエロタンがいたが、以前には新型の馬車の代金が精算できずに苦労していたのに、いまでは馬車を何台も所有し、旅館まで経営している身分である。つまり、この二つの馬車の間に、伯爵のお忍び旅行に協力した手柄で新型馬車を手に入れ、商売繁盛をきわめていったという事情が読みとれるのである。他の乗客も同様であるが、馬車が大型になった分、乗客も前より増えている。召使いベルジャンブを引き連れたオスカルとその母親、法螺吹きジョルジュ、画家のブリドー、レジェ親父、元管理人のモローの夫人とそ

の娘と婿のカナリス男爵夫妻、現管理人のレベール、という面々が乗っている。しかも、これは人物の単なる勢揃いではなく、それぞれの人生を背負って、そこに乗っている。

それにしても、「なんとまあ、うまく乗り合わせたものですなあ」とレジエ親父が叫ぶように、同じ馬車に乗った一同が、伯爵を除いて、十四年以上たつてから同じ定期便に乗り合わせるというのは、確率的にもおおよそありえないご都合主義の設定といえる。しかも、オスカールのしくじりが偶然的の乗りあわせからはじまったわけであるから、偶然是二重に仕掛けられている。

しかしここで、バルザックが、『人間喜劇』の他の作品で偶然的のいたずらともいえるつまらぬ些事が主人公の運命をきめるといったドラマを描いているのを、忘れてはいけない。『老嬢』のコレモン嬢が求婚しようとヴァロワと競っているブスキエの勝利をきめたのは、コレモン嬢が結婚相手と思いついたトレヴィルが家庭持ちと知って卒倒した翌日、ブスキエが一步早くコレモン嬢を見舞いに訪れたという偶然的の結果である。トレヴィルが化粧に時間をかける気取り屋である一方、ブスキエがむしゃらに突進する型の人間である結果であるとしても、現象としては時間差という偶然が運命をきめたのであり、この事件を語る前に、バルザックはつぎのような説明をつけている。

ランジエ公爵夫人は〔十三人組〕参照)、十分間忍耐しなかつたために修道女にならなかつたか。ポビノー判事は〔禁治産者〕参照)、エスパール夫人を尋問するのを翌日に延ばさなかつたであろうか。シャルル・グランデはナントから帰国する代わりにポルドーからこなかつたであろうか。そして、これら偶然的の事件は運命と呼ばれるのである。⁽³⁴⁾〔老嬢〕

括弧内は作者自身による注記である、注記のない最後の例はいうまでもなく、シャルルがボルドーから帰国したために侯爵の娘のオーブリオン嬢に出会い、爵位を嗣ぐ目的で彼女と婚約することになり、彼との結婚をひたすら待ち受けるウジェニー・グランデを悲嘆の底に突き落とす結果をもたらした事件のことで、偶然が大事を引き起こす典型的な例である。このようにバルザックは、偶然のもつ必然的な役割をはっきり意識しながら、創作に偶然のドラマをもちこんでいることがわかる。

こうして、偶然性をとりいれることに、バルザックはまったくアレルギーなど感じていないどころか、必然と偶然の内的関係をしっかりと把握していたのである。まして寓話であれば、それは自由自在というわけである。というわけで、バルザックは前述の他の小説の偶然性とは比較もできない純粹の偶然的出会いを喜々として実現させた。ここまで拡張された『人生の門出』の偶然性の役割は、近代リアリズム小説からは逸脱したものであり、こうした偶然を理屈抜きで受けいれることができなければ、この物語を享受できないであろう。

そればかりではない。主要人物が乗り合わせる馬車の場面が最後にくり返されることで、安泰な社会に収まったそれぞれの運命が、イメージとして示されるという効果をもたらしている。この場面で、登場人物たちは、馬車にゆられながらそれぞれが自分の身分を語り、ルイ・フィリップ体制という新時代の中で安泰な身分に落ち着いたさまが彷彿としてくる。彼らは、いわば体制内に箱詰めされた人生に落ちついたわけで、そのさまは、馬車という閉鎖的空間のイメージと親密につながっているようにみえないであろうか。そればかりか、この二度目の馬車の旅にはオスカーの母親まで乗りこんでいて、馬車はまるで母胎であるかのごとき温室状態になってしまい、そこで一同が陽気にはしゃいでいる。冒頭の馬車で世話を焼く母親を拒否し、外交官になるのだと意気がっていた少年の牙はみごとに抜かれてしまっている。

テキストの変貌

バルザックがロールの物語の筋書きの骨格を解体することなく、『人生の門出』を完成させた基本的態度には、ロールの物語への信頼と評価と、それらを含めたロールへの愛情とオマージュというものも考えられる。その一例として、バルザックが、部分的にはあるが、できる限りロールの表現そのものを生かしたという改作の態度がある。例えば、オスカールが馬車に乗ろうと母親と現れる場面での母親の服装の描写があるので、並列してみよう。

夫人は、黒い絹のドレス、雉鳩色のメリノのショール、乾し葡萄色の絹の帽子を身につけ、王様ブルー（ルイー四世の愛した青色）の柄のついた傘と麦わらで編んだ果物籠が、夫人の持ち物のすべてであった。（「輪馬車の旅」）

La dame était vêtue d'une robe de soie noire, d'un châle de mérinos tourterelle, d'un chapeau de soie couleur raisin de Corinthe; un parapluie à canne bleu de roi et un cabas de paille complétaient son équipement. ⁽²⁶⁾

その夫人は、染め直しの黒い絹のドレス、淡褐色の帽子、古いフランスカシミアの肩掛け、かま糸（真綿と木綿の混紡）織りのストッキング、山羊革の短靴を身につけ、麦わら編みの果物籠と王様ブルーの傘を手に使っていた。

（『人生の門出』）

Cette dame, vêtue d'une robe de soie noire teinte, d'un chapeau de couleur camérite, et d'un vieux cachemire fran-

cais, chaussée en bas de filoselle et de souliers de peau de chèvre, tenait à la main un cabas de paille et un parpluie bleu de roi.⁽³⁶⁾

バルザックは、ロールの描写をおぎない、「黒い絹のドレス」を「染め直しの黒い絹のドレス」としたり、「雉鳩色のメリノのシヨール」を「古いフランスカシミアの肩掛け」としているが、「染め直し」とか「古い」で夫人の外出用の服装にもいかにも生活を切りつめているさまが見えるかを描きだそうとしている。また、フランスカシミア（インドのカシミアのイミテイション）は当時高価なもので、豊かな暮らしをしていたナポレオン時代に求めたものであることをほのめかしている。また、「麦わら編みの果物籠」や「傘」は馬車に乗る習慣のない庶民の持ち物であるので、夫人が、質素な生活をしながら、昔のお洒落の名残を大事にしていることがよくわかるような描写になっている。⁽³⁷⁾

ロールの物語は、このあとすぐに、「彼女は（御者の）テイエリーに長々と話しかけた。おそらく、この小さな乗客を降ろさねばならない場所を説明して、その身柄をあずけていたのであろう」と、夫人の行動の描写になり、夫人が息子に色々注意をあたえる場面になるが、バルザックは、「彼女の物腰も身なりも、所帯と息子にすっかり身を捧げている母親の姿を示していた。帽子のあごひもは色あせ、その型は三年以上のものであった」として、息子にかまけた夫人が精一杯のおめかしをしている様を克明に描き出す。そして、「この母はいわば息子によって完全なものと なって いた⁽³⁸⁾」と母子がいわば一卵性母子であることを示したあと、御者に息子をたのむ情景につないでゆくが、さらに物語の核心につながる大事ないきさつがのべられる。

つまり、伯爵の領地の管理人モローは、夫人の家計を助けるために御者のピエロタンを運び屋にしていかに野菜や卵といった農園で取れる食べ物を夫人にみついでいるか、それはというのも、モローは夫人にひそかな愛情を燃やし、

「人一倍働く書記生活では、楽しみが希であるだけにそれを強烈に好むということがあり、とりわけ、人をついで無上の喜びで味わうのである」⁽¹⁾と語るように、バルザックにとつて、法律事務所は悪ふざけの場である。しかし、ここでは、じつはバルザック自身が思いきつてふざけている。そして、新人は事務所の古参を身銭を切つて供応しなければならぬという偽造された古文書の文面が、本筋からはみだして、面白おかしく列挙されてゆく。馬車でミスチグリがことわざのパロディーを並べ立てるといった諧謔の場面と対をなす部分であり、ここにも、『人生の門出』の諧謔小説的特徴が垣間見られる。

しかし、世にも恐しきものは悪ふざけというわけで、じつはこの諧謔こそが、オスカーの抑圧された欲望を解き放ち、二度目の決定的なあやまちを引き起こす前提となるように、筋が運ばれてゆく——新人として現れたのが、馬車でオスカーの最初のあやまちをもたらしたジョルジュの従弟であり、彼によつて歌姫のサロンで法律事務所の面々を遊ばせるという豪華なもてなしがなされ、それまでストイックな書生生活を送っていたオスカーは、またもジョルジュにけしかけられて、あつという間に賭と美酒で正気を失い、裁判の処理のためにあずかつた大金を失つてしまふことになる。

しかしバルザックは、オスカーの性格と周囲の枠組みから、こうしたあやまちが必然的に到来したさまを描いてゆく。馬車が閉鎖的な空間であるとしたら、法律事務所も閉鎖的な箱詰めの空間である。カルド叔父によつて、「仕事、忍耐、慎み、誠実」の四つの徳目を守るように法律事務所に送りこまれると、オスカーはそれを守つて二十二歳で次席書記にまで出世する。しかし、法律事務所の世界は、オスカーにとつて、保護者によつて四つの徳目を守るべくしつらえられた空間にはかならない。それは、カルドが送りこみ、デロツシュとゴドシャルという法律家の先輩が監視する場であつた。そのような保護者と監視者を通して母親の目も注がれている。だから、オスカーはバリ

そのためオスカーの学校の給費まで負担していて、オスカー少年の今度の旅は少年の将来の可能性を判断するため自分の許に送るよう夫人に頼んだためであることが、説明される。

これはほんの一例であるが、バルザックは、要所所でこのようにロールのテキストをふくらまし、横道にそれ、登場人物をつなぐ隠された横糸をたどってみせる。そうした横糸のすべては、物語にバルザックの相貌をあたえるために欠かせぬものなのであるが、一方では、少年のあやまちを描くというロールが紡いだ太い縦糸は、しっかりと全編にわたって通されている。

閉ざされた空間

結末にも馬車の場面をもつてくることで、登場人物の人生を箱詰めにしてしまうというイメージについては、すでにのべたが、それでは、「転」に当たるパリの法律事務所と、オスカーが戦場に出て、勇敢な働きをして伯爵の息子を助けるという場面はどうであろうか。

まず法律事務所であるが、これは法律事務所働いていた経験をもつバルザックにとつて、お得意の舞台であるのはいうまでもない。バルザックはここで、『シャベール大佐』の冒頭にあるデルヴィルの法律事務所での諧謔と生氣にあふれた雰囲気を再生する。そもそもこの法律事務所には、元の夫ユツソンの妹の夫ということから、ユツソンを名乗る血筋の甥の面倒をみるよう母親が常日頃あてにしていた、カルド叔父の世話で送りこまれている。そのデロッシュの法律事務所には、主席書記としてゴドシャルがいて、オスカーの教育はこのゴドシャルに託されるが、彼はシャベール大佐の事件を扱ったデルヴィルの法律事務所から独立した代訴人であるから、ここで読者は、オスカーとともに一気に『人間喜劇』でおなじみの世界に投げこまれるといつてよい。

の世界に放たれたわけではなく、オスカーはもうひとつの母胎に押しこめられたのである。

この第二のドラマでは、デロツシユ、ゴドシャル、フレデリック・マレ、フロランティエヌと、つぎつぎに新たな人物がオスカーの前に現れる。しかし、デロツシユとゴドシャルはカルド叔父がオスカーを委託する代訴人であり、フレデリック・マレはジョルジュの徒弟であり、フロランティエヌはカルド叔父が面倒をみている踊り子であるといった具合に、それらの人物が、結局は数珠つなぎになってオスカーを取りまいている人間関係の輪にすぎないことが、わかつてくる。

一方オスカーは、法律事務所で禁欲的な生活をしながら、心中は虚栄と享楽への欲望に悶々とし、「激しい葛藤がおこなわれていた⁽⁴⁾」のである。こうして、心的エネルギーが他者の力で抑圧されれば、その力を増し、きつかけがあればいつでも噴出するという心理学的法則を、バルザックは巧みに描いてゆく。折しも、フロランティエヌの夜会のもてなしがあり、次席書記に昇任したオスカーは久しぶりでいい身なりをし、書類を入手するためのいわば公金である五百フランを懐にして、夜会にふみこんだのがきつかけで、破滅的な失敗をするということになる。それに、たまたま保護者のカルドがフロランティエヌのもとを訪れたため、オスカーの醜態を目撃してしまうという衝撃的な場面を設定し、オスカーがどんときでも、保護者たちの目から逃れられないさまを描き出してゆく。

こうした場面ではしばしば冴えわたるバルザックの筆は、オスカーを守る大人たちの右往左往をコミカルに描きだす。オスカーが失敗して泥酔すると、フロランティエヌが、まるでオスカーの母の化身であるかのようにしきりに面倒を見て、賭金を貸しあたえたり、賭ですった五百フランの預かり金の立て替えまでする。それを知ってカルド叔父はフロランティエヌに返金し、五百フランをオスカーにあたえる。一方、事情を知ったゴドシャルの妹の踊り子マリエットは、デロツシユに五百フランを包んで渡し、ゴドシャルはそれを知らず、ポケットマネーから五百フラ

ンを都合して書類をととのえる。すべてを知ったデロッシェは、「五百フランの札の雨が降っているのかね⁽⁴⁴⁾」と皮肉をいうことになるが、ここでも、オスカーが二重三重にと保護されている場面を、バルザックは誇張的・喜劇的に描き出して、見せつけている。

オスカーはこうして、自己の意志を貫き、自己の野心を実現する開かれた社会に解放されたのではなく、周囲の大人たちによって、保護されていたのである。いいかえれば、このドラマを通して、オスカーがむしろ大人たちによって自立を妨げられていたのだと、バルザックは語っている。

つまりバルザックの意図は、大人たちが子どもを妨げるという逆説的教養小説を描くことにあつたのではないか。ラストイニヤックがペールラシェーズ墓場からパリを見下ろして叫ぶ、「さあこんどは、おまえと一騎打ちだ⁽⁴⁵⁾」とばかり英雄的な闘争に挑むバルザックの夢想する野心の時代は、すでに過去のものであるという社会的な現実と、当時の若者を取りまく状況を、ひしひしと感じとって生まれたのが『人生の門出』ではないか。

(ここ)で、バルザックの伝記的な事実の連想を補強すれば、バルザックの弟アンリとアンリを溺愛したバルザックの母親という母子の影が浮かび上がってくるが、これは本論の主題ではないので指摘するにとどめよう。

箱詰めの人

オスカーが二度目の破滅的なあやまちを犯したからには、物語は一気呵成に結末にすすむ。オスカーは義父のクラブールに向かつて、「ぼくは数ヶ月後に成年になります。当面未成年であろうとも、あなたはぼくには何らの権利もありません⁽⁴⁶⁾」と唐突に宣言するが、クラブールのみに向けられたこの言葉は説得力をもたず、カルド叔父はオスカーを戦場に送り出して鍛え直すほかないという判断をし、くじで徴兵がきまるといふ制度でくじ運悪く、戦場に

送り出されることとなる。

するとモローは、心配してオスカールの処遇を伯爵に頼みこみ、伯爵の息子のセリジー子爵所属の連隊にオスカールをいれる。アルジェリアの戦場では、オスカールはアラビア軍と戦闘を交え退却する際に、負傷して取り残された子爵を奪い返すという勇敢な戦いによって受勲し、中佐に昇進したばかりか、この働きで、父の伯爵ははじめて、十年前の馬車でのオスカールのおやまちを許すというように、とんとん拍子でオスカールの名誉挽回が進む。この語りは、『暗黒事件』で懲役二十四年の判決を受けたシムーズ兄弟が特赦を受け戦場で戦死を遂げて名誉を回復する後日談と似ているが、ここでは、話があまりにご都合主義的に進行する感があるのは否めない。それどころか、よってたかつて若者を鋳型にはめようという大人たちの力は、この最後の挿話でも張りめぐらされている。

まずオスカールは、自分の意志からでなく、大人たちによって戦場に送りこまれていく。ついで、モローたちが手をまわし、伯爵の息子のセリジー子爵所属の連隊にいれられる。七月革命になると、オスカールは自然に民衆側の軍隊に組みこまれ、やがてアルジェリアで子爵の救助するという前述のめざましい戦功をたてることになるが、バルベリスは、オスカールが、ただ自由派であったということだけでなんらの主義・思想なしに人民側に組みこまれてゆき、アルジェリア戦役にも自動的に参戦したにすぎないという指摘をしているが、物語の最後で要約されるように、オスカールが厳しい軍隊生活を通して学んだのは、なによりも「社会的階級制度と運命への服従」⁽⁴⁾である。そしてこれこそが、大人たちの意図であった。オスカールはこうして、軍隊の体験を通して七月王政のブルジョア社会に組みこまれてゆく。

ロールの物語の原型では、オスカールにあたるジョゼフが元管理人のルノーと共同して穀物取引などのいかがわしい投機をしていて、いつも貧しく、こそこそ隠れねばならない暮らしをしているという結末になっているが、バルザ

ツクは後半の語りを通して、こうした勸善懲惡的な教訓寓話の結末から脱却し、それぞれの人物がブルジョアの社会にいかにかまわってゆくかという結末に収斂させてゆく。

その収斂の場面として、最後の馬車の場面が使われるが、そこで、前半のドラマの主役たちは、乗り合わせた馬車にゆられながら、自分たちや周囲の者たちの身分を徐々にあきらかにしてゆく。ピエロタンは今や一介の馬車業者でなくホテル経営までし、何台も馬車を所有している。レジェ親父は手広く不動産業を営み、シネールという有名画家の名を騙っていたブリドーは押しも押されぬ大画家、同行のレオン・ド・ローラも一流の風景画家、不正を働きオスカールに伯爵の体の秘密を洩らして伯爵より追放されたモローは、七月革命で活躍して今や時めく代議士となり、娘を貴族院議員カナリス男爵に嫁がせている。オスカールといえは、ポントワーズの収税職を待ちながらとりあえずはポーモンの収税職につこうとしている。いってみれば、いずれも典型的に七月王政時代の中産階級の職業について上昇気流に乘ろうとしている。唯一失意の人は、保険会社の外交員になり下がったジョルジュであるが、これとても当代流行の職業にはちがいない。(王政復古時代にはじまった保険業は一八四一年ごろまでに加速度的に増大したとい⁽⁴⁸⁾う。)

またオスカールの母は、ジョルジュの入隊で絶望的になり、「自分の二度目の結婚の惨めさと、息子の多くの不幸とを、若い頃の過ちや快樂をあがなわせる神の復讐のためだとし⁽⁴⁹⁾」、信心に凝り固まり、「灰色の修道尼」さながらとなつているが、この最後の馬車の旅でもオスカールに付き添い、むしろ母親が息子から自立できないでいるさまが描かれる。

バルザックはさらに、これらの人々を結婚の輪でがんじがらめにしようとする。まず、レベールの娘はレジェと結婚し、その娘が、つまりレジェの孫娘はブリドーと結婚するというのが、一つの結婚の輪である。一方オスカールは、

ピエロタンの娘と結婚することになる。こうして、オスカールは地方的閉鎖的な人間関係の輪の中に完全に閉じこめられることになる。だからこそ、すでに二回のあやまちを犯したオスカールが、ピエロタンの娘に求婚するという三度目のあやまちを犯したと、バルザックは語る。そして、馬車に一同が乗り合わせるという場面は、オスカールがこうした人縁・地縁にからめとられる結末を具体的なタブローとして見せている。こうして、バルザックは、物語をつぎのように締めくくる。

オスカールは、ごくふつうの、おとなしい、山気のない、謙遜な、そして彼の支持する政府と同じように、常に中庸に身を処する人間である。彼は羨望の情もそそらなければ、軽蔑の念も起こさせない。要するに現代のブルジョアである。⁽⁴⁹⁾

この物語は、『人生の門出』という一見「教養小説」を思わせるタイトルをつけられながら、ここにあるのは、すでにのべたように、若者が自力でなく、よつてたかつて干渉する大人たちによって一つの型に押しこめられるという、アイロニカルな教養小説であるのは、いうまでもない。

このように書きかえられた『人生の門出』を、バルザックは、つぎのような献辞でもって、ロールに捧げている。

この場面の主題を私ににあたえてくれた、輝かしくも謙虚な心の持ち主が、その心根の榮譽をうけるように！

ロールの兄⁽⁵⁰⁾

一方ロールは、「二輪馬車の旅」を収めた『炉端の友』のために書きながら結局掲載されることのなかった序文の末尾で、つぎのように兄の献辞に答えている。

私は、つぎのことを指摘して、この序文を終わらせた。『二輪馬車の旅』は、あの博識の錬金術師に『人生の門出』という作品のインスピレーションをあたえろという名誉の印しをえたが、彼は人造宝石をダイヤモンドに変えたのである。そのために、彼の豊かな宝石箱に収められた宝石が、私に捧げられているのである。

パリ、一八五四年二月

ロール・シユルヴィル、旧姓バルザック^①

ここには、『人生の門出』をめぐる兄妹の深い絆と愛が読みとれるが、バルザックはまさに「錬金術師」であって、ロールにあった寓話の骨組みを十分に生かしながらも、それに肉付けをほどこして新たな小説を誕生させたといえる。こうして教訓寓話は、七月革命の熱狂の後に若者たちが共有した幻滅と閉塞状況を描きだす苦い社会小説へと、転進を遂げたのである。

注

(1) バルザックは「一八三五年のマクタの事件からかなりたった」という表現だけで何年か特定していないが（本論「二つの馬車の旅」参照）、セリジー伯爵の管理人のレベルに、セリジー夫人が姪のクレマンティヌを昨年九月にラジンスキー伯爵に結婚させたと作中で語らせ、『偽りの愛人』では、その結婚を一八三五年九月と特定していることから、一八三六年、つまり一八三三年の最初の馬車の事件から十四年後と推測することができる。

- (2) Philippe Mustière : Sur «Un début dans la vie»: jeu du hasard, espace de l'occasion, roman de l'intempésti, Année Balzacienne 1982, Paris, Garnier, 1982, pp. 195-209.
- (3) Pierre Barbéris : *Introduction dans La comédie humaine de Balzac*, Ed. PL., tome 1, p.730
- (4) Armand Hoog : *préface dans Un début dans la vie*, L'Œuvre de Balzac, Paris, Le club français du livre, 1966, pp. 367-373.
- (5) 私市保彦「動物寓話作家としてのバルザック」平成九年一月「武蔵大学人文学雑誌」第28巻第1号 一二五―一九〇頁
- (6) Balzac : *Correspondance*, tome IV, Paris, Garnier, 1966, P. 320.
- (7) Madame Surville Laure née de Balzac : *Le Compagnon du foyer*, Paris, D. Giraud, 1854.
同書に於て、このエッセイ作品が収められている。
- Contes des familles. Un crime échappé aux tribunaux. Deux jeunes filles parisiennes. La Montre du docteur. La Cousine Rosalie. Le Voyage en coucou. Paul Fidry. L'Auberge de la grâce de dieu.*
- (8) Christine Plante : *La petite soeur de Balzac*, Paris, Seuil, 1989, p. 153.
- (9) Mme Marie-Jean Durry : *Balzac. Un Début dans la vie*, tome 1, Paris, Centre de Documentation Universitaire, 1953, pp. 46-51.
Balzac : *Correspondance*, tome I, Paris, Garnier, 1960, P. 205.
- (10) Vicomte de Spoelberch de Lovenjoul : *Un roman d'amour*, Paris, Calmann Lévy, 1896, p. 163-164.
- (11) Mme Marie-Jean Durry : *op. cit.*, P. 29.
- (12) Balzac : *Correspondance*, tome IV, Paris, Garnier, 1966, P. 321.
- (13) *Histoire de L'édition française sous la direction de Henri-Jean Martin et Roger Chartier*, tome III, Paris, Promodis, 1985, P. 448.
- (14) キ・ロ・ウールが「原籍が田舎であった横田ヤコブ」の語句を類している。
- (15) Guy Robert: *Introduction, dans Un début dans la vie*, Genève, Droz, p. XXXVI.
Madame Surville Laure : *op. cit.*
- (16) Balzac: *La comédie humaine*, Ed. PL., tome 1, p. 1447-1468.
- (17) *Ibid.*, p. 1468.
- (18) Vicomte de Spoelberch de Lovenjoul : *op. cit.*, P. 174-178.
- (19) *Ibid.*, p. 168.

- (20) *Ibid.*, p. 170-171.
- (21) Balzac : *Lettre à Madame Hanska*, tome 2, Paris, Les Bibliophiles de l'Originale, 1968, p. 101.
- (22) Vicomte de Spoelberch de Lovenoûl : *op. cit.*, p. 170.
- Mme Marie-Jean Durry : *op. cit.*, p. 30.
- (23) Balzac : *La cour des messageries royales. La caricature*, 17 février 1831, *Œuvres diverses II*, Paris, Conard, 1938, pp. 301-303.
- Balzac : *Départ d'une diligence. La caricature*, 9 février 1832, *Œuvres diverses II*, Paris, Conard, 1938, pp. 477-478.
- (24) Edouard Gourdon : *La Physiologie des diligences et des grandes routes*, Paris, Terry, 1842
- J. Hilpert : *Le Conducteur de diligence*, tome II de *Français peints par eux-mêmes*, 1842
- (25) Auguste Ricard : *Le Cocher de fiacre, ou Quarante ans sur le pavé de Paris*, Paris, Lecoq et Durey, 1828.
- *La Diligence, ou le Coupé, l'intérieur, la rotande et la banquette*, Paris, Lecoq, 1833.
- (26) Pierre Barbers : *op. cit.*, p. 719-720.
- (27) *La comédie humaine* Ed. *PL.*, tome I, p. 733.
- (28) *Trésor de la langue française*, Paris, Centre nationale de la recherche scientifique, tome 6, p. 289.
- (29) Balzac : *Correspondance*, tome I, Paris, Garnier, 1960, p. 411.
- (30) Henri d'Almeras : *La Vie parisienne sous la Restauration*, Paris, Albin Michel, p. 98
- (31) N. Brazier : *Les Cochers de Paris*, p. 193, *cit. La Vie parisienne sous la Restauration*, par Henri d'Almeras, p. 99.
- (32) *La comédie humaine*, tome I, pp. 878-879.
- (33) *Ibid.*, p. 883
- (34) Balzac : *La comédie humaine*, Ed. *PL.*, tome IV, p. 906.
- (35) Madame Surville Laure : *Le Voyage en coucou*, dans *La comédie humaine* Ed. *PL.*, tome I, p. 1449.
- (36) Balzac : *La comédie humaine*, Ed. *PL.*, tome I, p. 757.
- (37) Balzac : *Un début dans la vie*, Genève, Droz, notes par Georges Matorel, p. 225.
- (38) Madame Surville Laure : *op. cit.*, p. 1449.
- (39) Balzac : *La comédie humaine*, Ed. *PL.*, tome I, p. 757.
- (40) *Ibid.*, p. 757.

- (41) *Ibid.*, p. 848.
- (42) *Ibid.*, p. 841.
- (43) *Ibid.*, p. 846.
- (44) *Ibid.*, p. 871.
- (45) Balzac : *La comédie humaine*. Ed. *PL.*, tome III, p. 290.
- (46) *La comédie humaine*. Ed. *PL.*, tome I, p. 857.
- (47) *Ibid.*, p. 887.
- (48) *Ibid.*, p. 877.
- (49) *Ibid.*, p. 887.
- (50) *Ibid.*, p. 733.
- (51) cit. Vicomte de Spoelberch de Lovenjoul : *op. cit.*, p. 163.

(二〇〇二年三月六日 受理)